トマス・ド・クインシーによる湖畔詩人の肖像

——個人の現実と理想像

藤巻明

絵画的肖像と文学的肖像　デヴィッド・パイパーDavid Piperとリチャード・ホームズRichard Holmesの二人が声を合わせて言及しているように、アメリカ人画家ウォシントン・オールストンWashington Allstonは、イギリス・ロマン主義詩人サミュエル・テイラー・コールリッジSamuel Taylor Coleridge（一七七二―一八三四）のもっとも優れた肖像画のひとつ［図1］を描いたにもかかわらず、この詩人の肖像を描くのに自分は力不足だったと認めている。

図1　ウォシントン・オールストンによるコールリッジの肖像　1814年　出典：Paley 54 Plate 11

私に判断できるかぎり、この肖像は本物そっくりである。しかし、それは休息状態のコールリッジであって……上機嫌の極みに――つまり詩的な状態にあるわけではない。そのような状態にあるときには私がこれまでに見たどの顔にも似ておらず、それは精神が目に見えればきっとこん

な姿だろうと思わせるもので、肉体性の影も形もそこにはなかった。しかし、それは私の腕のおよぶところではなかった。[*1]

コールリッジの肖像画研究で知られるモートン・ペイリー Morton Paley は、この詩人の肖像画を描くのが難しい理由を次のように示唆している。「コールリッジの容貌は短期間に劇的に変わりうるかのように思われるのであり、これは阿片中毒の影響によるものだったのかもしれない」。[*2]

しかし、当時の肖像画の似通いをあつかう際には、モデルの容貌の特性に由来する難しさばかりでなく、絵画の観念にまつわる時代の制約も考慮に入れなければならない。コールリッジの盟友だったロマン主義詩人ウィリアム・ワーズワス William Wordsworth（一七七〇－一八五〇）の現存する肖像画すべてについて詳細な研究をおこなったフランセス・ブランシャード Frances Blanshard の指摘によれば、ロマン主義詩人の肖像がたくさん描かれた十九世紀前半には、王立美術院初代院長を務めた画家サー・ジョシュア・レノルズ Sir Joshua Reynolds による古典主義的絵画論『講話集』*Discourses* の影響がまだ色濃く残っていた。そのため、当時の肖像画家は現在とちがって必ずしも似顔を描こうとせず、理想的な姿あるいは詩人としての類型を描こうとしたという事情もあって、肖像画家たちはモデルの似姿や個性を追い求めるのではなく、むしろ一般化、あるいは理想化さえされた姿を呈示しようとするのが普通だったという。つまり、特殊な個人性に固執するよりも類型を描くほうが重要だったのである。その結果、「眼前にある顔をそのままうけいれる大胆な

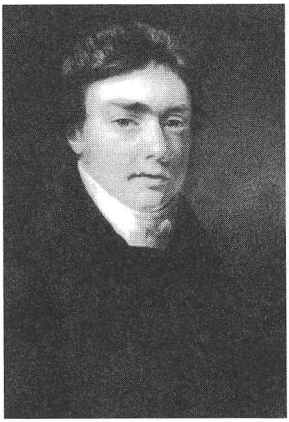

図3　マティルダ・ベサムによるコールリッジの肖像　1808年　出典：Paley 47 Plate 9

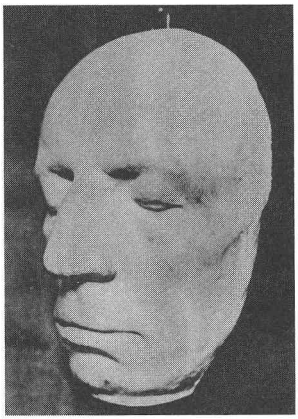

図2　ベンジャミン・ロバート・ヘイドンによるワーズワスの顔面石膏像　1815年　出典：Blanshard Plate 4

画家はめったにおらず」、「ほとんどどの画家も当時は……モデルを実物よりよく描いて喜ばせようとした」ことから、ブランシャードは、ワーズワスの肖像のそれぞれが詩人の人物像全体を忠実に反映しているかどうかを測る物差しとして、画家ベンジャミン・ロバート・ヘイドン Benjamin Robert Haydon が一八一五年に生身の詩人からとった顔面石膏像［図2］にくわえて、「一群の文章による肖像の助けを借りるべきだ」[*3]と提案する。

ペイリーもコールリッジの肖像画にかんして同意見のようだ。マティルダ・ベサム Matilda Betham の描くいくぶん理想化されたコールリッジの肖像［図3］が実物に似ているかどうかを確かめようとして、オールストンによる一八一四年の肖像画だけでなく、同時代の作家による散文描写に頼っている。「ベサムの描き方は

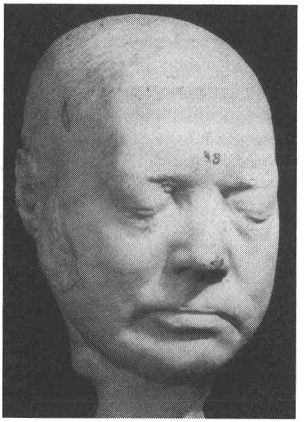

図4　J・G・シュプルツハイムによるコールリッジの顔面石膏像
1825年　出典：Paley 81 Plate 18

（見たことがなかったはずの）オールストンの絵ともド・クインシーの描写とも十分に似ているので、この絵は一八〇八年におけるコールリッジの肖像として信用がおけるものと思われる」というのだ。さらにペイリーは、ドイツ人人相学者J・G・シュプルツハイムJ. G. Spurzheimによる一八二五年のコールリッジの顔面石膏像［図4］が十九世紀には一般によく知られていて、ロンドンの新聞『ガーディアン』*The Guardian*が一八五四年十一月二十九日付の記事で、オールストンによる肖像画の実物との似通いを確かめるために引き合いに出しているほどだった、という事実を紹介している。[*4]

しかし、こうした姿勢はいささか本末転倒しているように思われる。なぜなら、肖像画の忠実さや似通いについて判断をくだすにあたって、人間の顔や表情を表象するのに絵画よりも劣ると一般的には考えられている文学的肖像をあてにしているからだ。

ここからは、散文が時には絵画的な表象の上手（うわて）を行って、モデルにいっそう忠実な肖像を呈示することがあるという推測が当然生まれてくる。その推測の正しさを確かめるため、ロマン主義詩人たちの数ある散文の肖像をとりあげ、そのそれぞれと、また絵画的肖像とを比較してみるのは興

味深い試みである。しかし、紙幅が限られていることもあり、チャールズ・ラム Charles Lamb やウィリアム・ハズリット William Hazlitt など、詩人たちと交友のあった散文作家のうちでも、とくにド・クインシーに焦点を合わせることにする。イングランド湖水地方に住んでいたため当時「湖畔詩人」と呼ばれたコールリッジとワーズワスの隣人として暮らし、のちにみずから作家となって、詩人たちについての肖像を描くことになった人物である。

本論では、ド・クインシーによる湖畔詩人たちの肖像の特徴と意義を考察し、文学的肖像と絵画的肖像の差異を二種類の表象間の比較をとおして明らかにしたい。

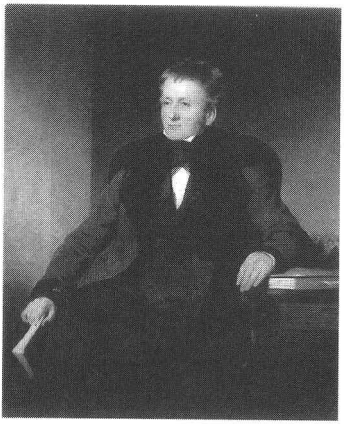

図5　サー・ジョン・ワトソン=ゴードン Sir John Watson-Gordon によるド・クインシーの肖像　1845年頃　出典：Holmes 41

ド・クインシーの略歴　主題にうつる前に、トマス・ド・クインシー Thomas De Quincey（一七八五―一八五九）［図5］が湖畔詩人の肖像を書くことになったきっかけを知るためにも、その略歴を知っておく必要がある。[*5]

一七八五年、湖畔詩人たちに十年以上おくれて、当時イギリス産業革命の中心都市だったマンチェスターに裕福な商人の次男として生まれたが、父は生来病弱で、息子が八歳を迎える前

に亡くなった。その後は、自分のうけるべき教育をめぐって母親と絶えず喧嘩し、やがて、無理やり入れられたマンチェスター・グラマー・スクールが嫌でたまらず、転校を要求したが無駄に終わった。一八〇二年十七歳のときに、学校を脱走し一人でウェールズとロンドンを八ヶ月ほど放浪したものの、所持金が底をついたこともあって、白旗をあげて降伏、親元へ戻った。一八〇三年の冬にオックスフォード大学ウスター学寮へ入学する少し前、この放蕩息子は、五年前の一七九八年に匿名で出版されて世間に注目されることもなかった詩集『抒情的歌謡集』*Lyrical Ballads* にいち早く感動し、コールリッジとともにワーズワスが著者であることを骨折って突き止め、熱烈なファン・レターを書き送った。

大学生活には失望し、「今考えれば、オックスフォードに住んだ最初の二年間に私は百語も喋らなかった」[*6]というほどの引きこもり生活をして、授業に出席したりほかの学生たちと遊び歩いたりする代わりに、古典文学、ドイツ哲学、イギリス詩などに読み耽った。リューマチの痛みを和らげるため、はじめて阿片を服用したのもオックスフォード時代だった。

学生時代の終わり近い一八〇七年の夏、『抒情的歌謡集』の著者の一人コールリッジとの面会をようやく果たしたあと、同年の初冬に湖水地方に住むワーズワスを訪れて念願をかなえた。翌一八〇八年初夏、大学最終試験をうけるも、なぜか二日目の口頭試問を欠席し、ド・クインシーはなんの学位もとらずに大学を永遠に去った。しばしの躊躇いののち、ついに湖水地方を頼り、最初はワーズワス一家の住むグラスミアのコテジに居候し、やがて、家族が増えて手狭になったため一家が

引っ越して空き家になるとそこに居を定めた。阿片中毒、農夫の娘との婚前交渉後の結婚などにより苦境におちいったものの、一八三〇年ごろ最終的にスコットランドのエディンバラに転出するまで、二十年以上にわたって、この地方に住みつづけることになった。結婚後、父親が残した遺産もほとんど尽きて、増える家族を支えなければならなくなり、一八二一年『ロンドン・マガジン』*The London Magazine* に、自分の阿片体験を語る『英吉利阿片服用者の告白』*Confessions of an English Opium-Eater* を掲載すると、大人気となった。これに励まされて、雑誌に文を書いて売ることで生計を立てる道をえらび、時に借金取りから逃れるために身を隠しながら、一八五九年七十四歳で他界するまで書きつづけた。

『告白』から十年以上のち、ド・クインシーは『テイツ・エディンバラ・マガジン』*Tait's Edinburgh Magazine* に、コールリッジについての記事を寄稿する。「そもそもこの記事を書き始めたのは、この偉大な人物の死についての予期せぬ知らせにより筆者の気持ちにもたらされた突然ながら深い衝動に基づいている」[*7]と触れているとおり、一八三四年十月に詩人の訃報を聞くとすぐに、その年の二月号から雑誌に連載していた阿片服用者としての半生を振り返る自伝的素描を中断して、追悼記事を翌年まで四回にわたって掲載した。四回目以降もつづくと広告されたが、広告倒れに終わり、自伝的素描に戻ってしまった。四年の間隔をおいて、ふたたび湖水地方を題材にとりあげ、今度はワーズワスを中心とする記事を五回、それから湖水地方全般について七回と、かなりの頻度で寄稿し、コールリッジの分もふくめて合計十六回におよんだ。これらの記事は、著者の死後『湖水地方

と湖畔詩人の思い出』あるいはそれに類する題名でひとつにまとめられることになる。[*8]

コールリッジ追悼記事と遺族の憤激　風光明媚な湖水地方で、ただの隣人にとどまらず偶像崇拝者として二十年以上にわたる交友を結んだ後輩作家が書いた回想録と聞けば、だれしも、美しい牧歌的な景色のなかで育まれた麗しい友情の記録を想像するにちがいない。しかし、その記事が詩人たちの周囲にひきおこした衝撃の激しさを知れば、それは早合点にすぎなかったとわかる。コールリッジの義理の弟で湖畔詩人の一人でもあるロバート・サウジー Robert Southey は、ド・クインシーを「社会的団欒に対する中傷家、卑劣なスパイ野郎、逆賊、卑しい裏切り者」[*9]と口をきわめて罵った。

おそらくサウジーをもっとも怒らせたのは、結婚についての言及だったと思われる。ド・クインシーは、「コールリッジ自身が私に請け合ったところによれば、結婚は自ら熟慮した上での行動ではなく、律儀なサウジーが、F―嬢へのコールリッジの求愛はとても名誉ある撤退など不可能な段階に達していると主張したために、いわば道義心に照らしてやむをえずそうする羽目になったということだった」と明かしている。サウジーがこの発言に怒らずにいられなかったのは、不幸なことに、それがおおむね真実だったからだ。ド・クインシーはこの程度では満足せず、不幸な結婚に由来するコールリッジの落胆の表情を、「廃墟と化したバビロンの光景も、狂気によって錯乱した人間の精神ほどは痛ましくも荘厳でもない」[*10]というジョゼフ・アディソン Joseph Addison の名言の正

しさを立証する好例としてあげ、傷口に塩をすりこんでいる。

悪意あるくだりはほかにいくらでもある。回想の冒頭から、コールリッジによるたくさんの剽窃の例があげられ、王立研究所で連続講演をしたときの姿も法外に戯画化されているが、一般にこの講演はド・クインシーが示唆するほど完全な失敗ではなかったと考えられていた。[*11]

また、ド・クインシー自身と同じく「既に阿片の完全な支配下にあると、本人自ら私に明かした」ことを公にしてもいる。このおまけとして、隷属状態を断ち切るために、ある男を自分の「外なる良心」として雇って、「自分と薬屋の戸口のあいだに断固として立ちはだかる権力を与え」[*12]たが、当然ながら無駄に終わったという、荒唐無稽な挿話をくわえて遺族たちの憤激の焔に油を注いだ。

コールリッジの記事の最終回で、「コールリッジの思い出に寄せる畏敬の念に満ちた愛情という筆者自身の深い思いを口に出すことによってそれ〔逝去によってひきおこされた筆者の悲しい気持ち――引用者註〕を和らげる」[*13]ことが、このエッセイを書く目的のひとつだったと明かしているが、コールリッジの遺族による反応はこの意図と両立しない。このような態度の変化は、ド・クインシーの当初の両詩人にたいする心酔ぶりからすれば信じがたいものであり、その理由は考察に値する。すでに批評家たちが指摘しているとおり、コールリッジとド・クインシーにはあまりにも共通点が多い。[*14]阿片中毒、優柔不断、卓越した会話術、脱線するおしゃべりと文章、ドイツ観念論哲学への深い関心、その他あげれば切りがない。ド・クインシーは、コールリッジの会話における迂回的傾向について書いている。

多くの人々にとってコールリッジは、私自身そうした苦情を少なからず耳にしたことがあるのだが、取り留めがないように見えた。しかも実際には、当人の脱線本能への抵抗の気持ちが最も大きな時に――すなわち、その例証が辿る曲線と巨大な迂回路が折り返し点で方向転換を始める前の最も遠くの領域に達した時に――最も大きく脇道へ逸れるようなのである。このような方向転換が始まるずっと前に、たいていの人はコールリッジの姿を見失い、当然のことながら当の本人も自分の姿を見失っているのだと推測していた。[*15]

しかし、ド・クインシーも、とりとめのなさという点では甲乙つけがたい。この回想録が「取り留めなく成り行きにまかせた文体で」書かれているのは、詩人亡きあとの「余りに慌ただしい情況下に置かれていたために」、「最初に構想をしっかりした土台の上に据えておいて、秩序立った展開の筋道を追えるような」文章よりもむしろ、「書簡体形式あるいはその他の自然らしさを装った様式の文章に備わる美点を追い求める」[*16]ことにしたからだと、読者に向かって言い訳がましく語っている。

別のエッセイでは、脱線しがちな傾向を自覚しながら、それを欠点として改めようとするどころか開きなおって、「こうした素描の各部分を、縄や太い綱でなく、霊妙な蜘蛛の糸によってつなぎとめる特権を捨てるつもりはない」[*17]と片意地をはっている。自己弁護的な発言ではあっても、こ

れは無理やりの理屈でなく、緩やかな連想で文をつなぐド・クインシーの散文の特徴をよく表わしている。他方、コールリッジの側も手紙のなかで、ド・クインシーについて「気は急いているのに緩慢で、正確を期するあまりに混乱していて、体系的であると同時に迷路的でもある」[*18]と膝を打ちたくなるような見事な描写をしているが、これは自分自身の自画像としてもだいたい当たっていた。

ペンギン版『湖水地方と湖畔詩人の思い出』の序文で、編者デヴィッド・ライト David Wright が指摘するように、お互いにとって、「相手のうちに自分とそっくりの姿を」見るのは「必ずしも心地よい経験ではない」[*19]ので、ただでさえあまりにも似ている二人のあいだには激しい対抗意識が生まれやすい。そのうえ、二人の性格は鏡に映ったように瓜二つであるにもかかわらず、一方は人生でたくさんの支持者に出会い、「一人の友人が去るが早いか、別の、そして更にまた別の友人が続いて現われた。その人生行路には、思慮分別があってしかも熱烈な支援者という替え馬が並んでいた」[*20]のにたいして、他方には支持者がほとんどだれもおらず、増えていく家族を自分の腕一本で支えなければならなかった。これでは後者に妬みの気持ちが生まれたとしても仕方がない。理由を完全に突き止めることは難しいと思われるが、長い年月を経て、当初の心酔から愛憎半ばする複雑な思いへと変わってしまったことはわかる。

再開された湖畔詩人の素描とワーズワスの罵倒　それから四年後の一八三九年に、ド・クインシー

が湖畔詩人ついての素描を再開したとき、ワーズワスはまだ存命で、まもなく七十歳になろうとしていた。自分の盟友についての記事への反応はどちらかといえば穏健なもので、遺言執行人にたいして雑誌に圧力をかけて以後の掲載を中止させるよう助言する程度でおさまっていたが、今回は自分の気持ちを抑え切れずに、かつての弟子を罵った。「こんな前例をつくった人間を、私は社会の害虫であり、人類でもっとも無価値な者と見なす[*21]」と。

なにがそれほどの憤激を招いたのか。自分の容姿の欠陥を他人から事細かに指摘されてうれしい人間はいない。

まず、ド・クインシーは脚と胸を次のように描写する。「ワーズワスはだいたいにおいて均整の取れた人ではなかった。その脚は、……脚にうるさいあらゆる女性から辛辣に非難され、……明らかに鑑賞向きではなく、……容姿の最悪の部分は胸であった」。次には、ワーズワス一家に「老年が及ぼす特異な影響」に触れて、「兄妹それぞれに対するこの影響は余りに強力で……早すぎる老いの表情をもたらすため、初対面の人は一人残らず二人が実年齢よりも十五歳から二十歳年上と思ったほどだった」という所見を述べる。しかし、この程度ではまだ満足できないらしく、さらにつづけてワーズワス本人から聞いた逸話を報告する。それによれば、まだ三十九歳になる前なのに、駅馬車に乗り合わせた客たちから六十をとうに越えていると思われたというのである。これは読んでいる読者にとっても後味がよくない[*22]。

攻撃の矛先は詩人だけに向けられていたわけではない。ワーズワス夫人メアリー Mary[図6]は

「厳格な批評を適用すれば、凛々しくも、見目麗しくさえもない――いやそれどころか、きわめて不器量と一般に認められている――女性」であり、ワーズワスが「美しき薄暮の星の如き」穏やかさを湛えたと詩に描いた目は「かなりの斜視だった」と、詩もろとも揶揄している。さらに、その知性についても口を噤(つぐ)むことはない。「『おや、まあ(ゴッド・ブレス・ユー)』としか言えない。確かに夫人の知性は活発な部類には属していなかった」。全体として、どういうわけか、一家のなかではこの妻にたいしてド・クインシーはもっとも手厳しい。ワーズワスにとって大切な妹ドロシー Dorothy でさえ、批判を逃れられなかった。「電光石火の如く速い動作と……歩く時の前屈みの姿勢のために、風采に不格好というばかりか、女性らしくない性格までもが付け加わっていた」[*23]。家族にたいするこうしたむごい言葉は詩人の胸に突き刺さったにちがいない。

図6　マーガレット・ギリス Margaret Gilliesによるメアリー・ワーズワスの肖像　1839年　出典：Juliet Barker, *Wordsworth: A Life*（London: Viking, 2000）Plate 27

ド・クインシーの失望と心変わり　ワーズワスの詩が世間で一顧だにされていなかった一八〇三年に早くも熱烈なファン・レターを書き送った十八歳の若者がこのように変わってしまったのはなぜだろうか。

すでに見たとおりド・クインシーがコー

ルリッジと似すぎていたのと対照的に、ワーズワスとは性格的にまったく正反対だった。ド・クインシーとワーズワスの関係を、やりとりされた手紙を吟味しながら見事に考察したジョン・E・ジョーダン John E. Jordan は、二人のちがいを鮮やかに浮き彫りにしている。「ド・クインシーが区別立てを糧とする頭脳生活を送っていたのにたいし、ワーズワスは確信によって育まれる精神生活を送っていた。……ワーズワスの白黒はっきりさせるやり方はド・クインシーを苛立たせたが、一方ではド・クインシーのくるくる変わる灰色のどっちつかずの態度がワーズワスを困らせていた」[*24]。このように男性的で決断力のあるワーズワスにたいして、幼くして父親を亡くしたド・クインシーは、エドワード・サックヴィル＝ウェスト Edward Sackville-West の指摘するとおり、父親の代わりを期待し、まだ詩人が世間に認められる以前から捧げた献身的忠誠の見返りとして、家父長的庇護を求めていた節があるが、崇拝者の期待が十全に叶えられることはなく、しだいに詩人への思いは失望へと変わっていく[*25]。

> われわれ二人〔ド・クインシーと隣人のウィルソン教授〕のどちらも、人生のあらゆる時期において捧げるのに相応しい深い敬意をもって、若い頃には子が父に対する以上の献身をもって……接していたが、二人のどちらも、ワーズワスからの友情と親切のお返しを当然要求する権利があったとこの上なくきっぱり断言できるにもかかわらず、そのようなお返しに与ったことはこれまでになかった。怒りというよりはむしろはるかに悲しみ……の気持ちを強く感じつつ、私は

自分がワーズワスと疎遠になってから久しいことを認めよう。時には敵意の……高まりを感じることさえある。人の心の移り変わりの何という不思議！[*26]

なかでももっとも激しい幻滅を感じたのは、マーガレット・シンプソン Margaret Simpson との結婚を、相手が紳士階級のド・クインシーとは身分的に釣り合わない農民の娘であるうえに、婚前交渉の結果子供がすでに生まれていたという理由で、ワーズワス一家全体から反対されたときだった。ワーズワス一家のような湖水地方土着の人びとからなんの支援もうけられずに、そもそも自分の故郷ではない土地にあって孤立無援だと感じていた。ド・クインシーは文中で、多年にわたり他人のために尽くしてきた人間の例を思い浮かべる。

この人物が自然に育まれる人間関係（コネクション）を欠いて周りの世界から絶縁状態に置かれていたせいで、人間関係（コネクション）や家柄や長い定住のおかげで名を知られた立場にあって人に認められ、いわばその地方に根を下ろした一家から何らかの支援を受けることがきわめて重要だと思われるような境遇に陥ったと仮定しよう。この支援を当てにすることは、いま仮定したような方法で己れの献身ぶりを立証してきた者の側からすればごく慎ましい要求と思われよう。その支援を得られないとなると――だが、もうたくさんだ。ぐずぐず言うのはよそう。いつだって不平は力なきもの。[*27]

コールリッジにたいしてと同じように、苦い思いは自分の赤貧状態と「一定の間隔をおいて、似たような、しかしもっと素晴らしい天からの賜物が定期的に引き続いて降ってきて、出費を支えてくれた」という「ワーズワスの幸運」を比べたときに増幅されたにちがいない。はしたないほど臆面もなく、「ワーズワスが幾つかの段階を経て……贅沢の高みへと到達したこと」[*28]への羨望を吐露している。

湖水地方関係の最終回の記事でド・クインシーは、ワーズワスの知的関心の偏狭さと書物全般にたいする無作法な態度をさらなる仲違いの原因にあげている。別の一節では、自分が貸した本のページをバターで汚れたナイフで切られてしまったことを思い出している。「このナイフを携えて遮二無二本の中心へ向かって進軍し、通過したあらゆるページの上に脂ぎった勲章を残して行った。そして、今日に至ってもその勲章がそこにないわけがない」[*29]。アレグザンダー・ポープ Alexander Pope 流の滑稽な語り口で述べてはいるものの、愛書家のド・クインシーははらわた煮えくり返る思いだったはずだ。とうとうワーズワスにたいして裁定をくださなければならない時が来る。

> この欠陥〔同時代の普遍的な感情にたいするワーズワスの共感の欠如〕が、それまで私の偶像崇拝を支えていた幕を引き上げてしまった。私は今や、この詩人を特別な虚弱さと特別な強さからなる異種交配の生き物と見なしていた。そして最後には、もはや対等の友情を結べる人間とは見なしていなかった。[*30]

ド・クインシーや詩人たちの友人で、その交友を記録した死後出版の日記で知られるヘンリー・クラブ・ロビンソン Henry Crabb Robinson によれば、ド・クインシーが湖水地方に居を定めた八年後の一八一六年、結婚前のマーガレットが身籠ったときには、師弟二人はすでに子供じみた方法で互いに顔を合わせるのを避けていたという。[*31]

内なる共感　こうして描かれる詩人たちの欠点や弱みが、称讃だけからなる偉人伝にはない人間臭さを添えて、いわば等身大の肖像を描きだすことに寄与しているのは間違いないとしても、この回想録の面白さが、自分の奉仕が報われなかったと感じるかつての弟子による詩人たちの私生活の暴露や悪口雑言だけにあると判断するなら、それはやはり早合点にすぎない。コールリッジの遺族のなかにさえ、娘セアラ Sara のように、「自分の両親について、あれほど多くの個人的な委細を公にされたことで……昔の友人ド・クインシー氏によってひどく傷つけられた」ことを遺憾としながらも、「自分の父親の天才と独特な会話の流儀を描きだした」「偉大なる雄弁と鑑識眼」を率直に認め、かつての友人を弁護する人物がいた。

コールリッジ氏にたいして検閲官のごとく厳しい批判者が数あるなかで、ド・クインシー氏はもっとも傾聴に値する意見をもった人であった。……みずからを阿片服用者と呼ぶこの人物

は、批評の対象となる人物への内なる共感を十分に宿しており、批評対象の精神をある程度まで実際あるがままに、しかも個人の現実が醸しだすすべての混じり合う色合いのなかにおいて見ることができた。[*32]

たしかに、こうした「内なる共感」がド・クインシーにひとかけらも残っていなかったとしたら、約三十年前のコールリッジとの初対面の様子をあれほど鮮烈に描写することはなかったにちがいない。

風体は次の通りだった。身の丈は五呎八吋（フィート インチ）ほどに見えた（実際にはそれよりも約一吋半高いのだが、背を低く見せてしまうような容姿をしていたのである）。体つきは肩幅が広くふっくらとしており、幾らか肥満気味でさえあった。肌は色白であったが、黒髪と組み合わせになっているために、画家たちの専門用語でいう色白（フェア）ではなかった。目は大きく、その表情は柔和だった。お目当ての人であると分かったのは、目の光に靄がかかっているというか夢見心地を湛えているような独特の様子からであった。これがコールリッジだった。私は一分かそこらこの人物をしげしげと眺めていた。すると、私自身の姿も通りにある何物もその目に映ってはいないという印象を受けた。白日夢にどっぷり浸っていたのだった。というのも、私が馬を降り、宿屋の戸口で細々（こまごま）とした手続きを幾つか済ませて、この人物の方へ進んでから漸く私の存在を意識したようだっ

たからである。自分の名を告げる私の声で初めて目を覚ました。はっとして、一瞬私の目的も自分の置かれている情況も理解できずに途方に暮れているようだった。というのは、われわれのいずれにとっても無関係なことをいろいろと早口に繰り返したからである。[*33]

何年も追い求めてきた憧れの人物を目にしながら感情に流されることなく、落ち着いて冷静に描写をおこなって、コールリッジの特徴をなにひとつ見逃していない。観察対象にたいするこの距離をおいた視点こそ、ド・クインシーの散文の基本をなし、読むに値するものとしている要因である。さらに、描写があまりにも生き生きしているので、本当に二百年前のコールリッジがわれわれ読者の眼前に現われたような錯覚をおこす。とりわけ、白昼夢にひたって目に靄がかかり、何物もその目に映っていなかったというくだりを読むと、ぞくぞくと身震いするのを禁じえない。これぞまさしく阿片服用者の大先達にして、ド・クインシーのはるか上を行くコールリッジの面目躍如である。[*34] 時間の経過による記憶の多少の風化や無意識の歪曲の可能性も否めないとはいえ、この鮮烈な描写はグレヴェル・リンドップ Grevel Lindop が指摘したような抜群の「『写真的』記憶能力」[*35]があってはじめてなしうる離れ業である。われわれがこの一節を読んで思わず歓喜してしまうとすれば、やはりここに完全には失われることのなかった先輩詩人への「内なる共感」を感じとっているからにちがいない。

セアラ一人にとどまらなかった。クラブ・ロビンソンは、ワーズワスの怒りをなだめようとして、

「これらの記事のなかには、出版して三十年もすると、孫たちが誇りと満足をもって読むようになる箇所がかなりあります――たぶん、この不幸な書き手は率直であろうと心がけているのです[*36]」と論評を加えた。なるほど、ド・クインシーはあまりにも率直なため、ともすれば冷たい、あるいは残酷とさえとられがちながら、その正確にして生き生きとした観察と描写は、ドロシー・ワーズワスに目を向けるとき、めったにお目にかかれないほどの高みに到達している。

その目は、ワーズワス夫人のように柔和ではなく、かといって険しくも大胆不敵でもなく、熱に浮かされていて、人をどきりとさせるようで、動きが気忙しかった。人当たりは温かく、熱烈でさえあった。感受性は生まれつき深みを帯びているようだった。そして、熱烈な知性の名状し難い焔が一見して明らかにそのなかで燃えていた。

この一節の前後にある、「その顔エジプトの民の如く褐色」にして、「容姿と身のこなしをよく見せる嗜みを培ってはいなかった[*37]」という描写は、若い女性にとっては酷すぎるにしても、ここにいるドロシーは紛れもなく、兄の傑作詩「ティンタン修道院」のなかで兄の傍らにいて「射るような光を帯びた／お前の熱に浮かされた目[*38]」で兄と周りの自然を見つめているドロシーであり、その姿は詩のなかよりもさらに肉づけされている。「目覚しい才能を授かった人物であった」ことにも忘れずに触れてから、いまや、神経性憂鬱症に苦しんでいるとただ噂に聞くだけになってしまった

ドロシー［図7］に向かって、悲しい別れを告げる。

あなたの姿を長らく目にしていない――おそらく、今後二度と目にすることもないであろう――が、あなたが存命と伝え聞く限り、思い遣りの籠もった関心を懐きつつ私はあなたの足跡に注目し続けるだろう。……そして、燃えるような青春期のあなたを知り、称讃していた……人間の心から、愛と敬意の籠もった憐れみとに満ちたいつも変わらぬ追憶が捧げられていることを確信できれば、あなたの塞ぎの虫の憂鬱が時には晴れるかもしれない。[*39]

図7　サミュエル・クロスウェイト Samuel Crosthwaite によるドロシー・ワーズワスの肖像　1833年（ドロシー62歳）出典：Blanshard Plate 46

ここには、やはりコールリッジにたいするのと同じ「内なる共感」が感じとれる。

鋭い観察眼と乾いた滑稽味　この作品中に、当時流行していた「骨相学（フレノロジー）」という、人の頭と顔の形から性格を判断する擬似学問への言及が頻繁にあることからも窺えるように、ド・クインシーは人間の外観に異常なまでの関心をよせており、人びとの姿や振る舞いを

微に入り細を穿つように観察していた。分別のある範囲におさまらず悪乗りしてもう十分と思わされることも時にはあるが、詩人の身近にいた者で、しかも観察眼をもちあわせた人でなければ提供できない有益な情報を与えてくれる。必ずしも悪意がないとはいえない人物描写のなかにも、乾いた滑稽味のようなものがあって思わず微笑みを誘う。

ワーズワスの容姿の全体的印象が最悪なのはいつも決まって動いている時であった。というのも、土地の人の多くから私が耳にした見解によれば、「沙虫（ケイド）のような歩き方をした」――沙虫（いさごむし）は斜め方向の動きによって前進する昆虫の一種――からである。これはいつも目につくというわけではなく、目につくかつかないかは腕の位置がどこにあるかによってある程度左右された（と私は思う）。腕のどちらかがたまたま釦を外したチョッキに挿し込まれていると（そうするのが通例のようになっていたのだが）、その歩みは歪んだというか捻じれたような格好になった。しかも格好だけでは済まなかった――というのも、私は経験して知っているのだが、ゆっくりと、段々にではあるが、連れ合いを本街道の中央から端へとじりじり斜めに追いやったからである。[*40]

サックヴィル＝ウェストがいうように、こうした「乾いた、悪戯っぽい滑稽味」を味わうのも、この回想録を読む面白みのひとつである。[*41]

虫のような歩き方のほかに、詩人の体の各部、脚や肩をけなしたあとで、ド・クインシーはその顔について実に詳細な記述をはじめる。

一方、顔は――顔は体つきの欠陥がたとえもっと大きかったとしてもそれを補うことができたほどのものであった。その顔は、知的な印象の点において、実生活においてこれまで私が見たうちで、あるいは少なくとも意識的にそれと気づかされたうちで、最も気高いものであることに間違いなかった。これと似たような、あるいはこれよりも見事な顔つきは幾らでも、ティチアーノの肖像画や、もっと後の時代では、エリザベスとチャールズ二世の宮廷の肖像画もそうだが、ヴァンダイクによるチャールズ一世の偉大な時代の肖像画の中で目にしてきたが、われわれの時代ではこれほど私に強い印象を与えたものはない。[*42]

ここには、かつての崇拝対象への称讃がまだ残っているのが見てとれる。これにつづけて、顔の造作の一つひとつをこと細かに叙述していく。「間違って卵形と分類されることもよくある縦長の顔」、「高さにおいて目覚しいというよりも、おそらくその横幅と広々と発達を遂げていることにおいて目覚しい額」、「どこかで間違って述べられているように、ワーズワスの目が『大きい』わけでもない。むしろその反対に、目は（私が思うに）どちらかといえば小さい。しかし、それだからといって、その印象が時として見事であり、持ち主の知的性格にふさわしいことと矛盾するわけではない」。

「鼻は少し鷲鼻気味で大きい」。「口の上とその周りの部分の盛り上がり方と突き出し方は、両方ともただそれだけでも注目に値する」[*43]。時に自分を抑え切れなくなって茶化すことはあっても、ここではおおむね距離をおいて客観的な姿勢をとっている。こうして描かれたものが、ウィリアム・ワーズワスの人物像を知る手助けになるのは間違いない。

しかし、容貌についての入り混じった記述のあと、ド・クインシーはワーズワスの容姿の美点だけでなく欠点にいたるまでこまごまと書いたことを振り返って、自分の忘恩と無礼にたいする非難が生じることを予測し、自己弁護の必要を感じる。

> いかなる記録であれ、シェイクスピアの日常生活を――その個人的また社会的な習慣を、その知的な好みを、同時代の人々、書物、出来事、国家の先行きに対するその意見を――覆ってきた幕を万一上げてくれるものがあるとすれば、われわれ皆がそれをいかに貴重なものと感じることだろう！　それゆえ、ワーズワスの容姿と生活習慣についてこの上なく詳細な報告を過去にしたからといって、あるいは今後することになるからといって、そのことを弁明する必要があるとは私には思えない。[*44]

かつて崇拝対象であった師にたいして厳しすぎる言葉を発したことに、後ろめたい思いを懐いて自己正当化しようとする気持ちもわからないではないが、ド・クインシーによる湖畔詩人たちの肖像

のいくつもの箇所が、詩人たちの内面だけでなく外面の特徴に言及する際に、それこそ「貴重な」情報源としてきわめて頻繁に引用されていることは、ブランシャードやペイリーの著作に見るとおりである。いまだからいえることながら、この理由があるだけでも、このような自己正当化をあえておこなう必要もなかったと思われる。

たぶん、ワーズワスにたいしては、コールリッジの場合よりも、失望の思いがはるかに強かったにしても、やはり「内なる共感」を完全に失っていたわけではないことは、「体つきの欠陥がたとえもっと大きかったとしてもそれを補う」ほど「この上なく気高い」顔を称讃していることや、ワーズワスの詩から無数の、しかも相当正確な引用をおこなっていることからも明らかである。ジャドソン・S・ライオン Judson S. Lyon によれば、この回想録を執筆中、貧困のどん底にあったド・クインシーは、借金未返済の罪で逮捕されるのを逃れるために、あちこちの借家を転々として身を隠さなければならず、その結果、長年にわたって収集した書籍が引用のため必要とされたときには手元になく、記憶だけを頼りに引用せざるをえなかったという。[*45]

愛憎半ばする思いから、時にあまりに厳しい態度をとったり、あるいは戯画的に描いたりすることはあったとしても、詩人ワーズワスにたいしては終生変わらぬ忠誠を懐きつづけたという、ライトの指摘を忘れてはなるまい。「人間ワーズワスにたいするド・クインシーの愛情はついに崩れ去った。たぶんそれはそもそもあまり強いものではなかった。心を捕らえていたのは詩人だった。詩人ワーズワスにたいしては決して忠誠を失うことはなかった。[*46]」

湖畔詩人の迫真の肖像　時に、詩人たちにたいしてあまりに冷酷とさえ見えることもあるとはいえ、トマス・ド・クインシーは、優れた観察力とそれを表現する筆力に恵まれた者だけが描きうる湖畔詩人の迫真の肖像を見せてくれる。先輩詩人たちへの自分の献身が報われなかったという思いがあるために、詩人たちを戯画化しようとする意図が見え隠れし、ライトが示唆しているように、客観的なカメラのような視点をつねに提供することはないのかもしれない。[*47]

また、ジョン・ビア John Beer は、この回想録が不完全なものであると見なしているが、[*48] 前に紹介したとおり、ド・クインシーみずから、「秩序だった展開の筋道を追えるような」伝記ははなから諦めて、「取り留めなく成り行きにまかせた文体で」書くことを選んだと認めている以上、断片的、脱線的になるのは避けがたかった。

しかし、それでもやはり残された肖像は、真実の姿に肉薄していると思わざるをえない。その当時の多くの肖像画がそうだったように、詩人たちが喜ぶほどの理想化をおこなっていたとしたら、あのような怒りに満ちた反応を家族のあいだにひきおこすことはなかったはずだ。ド・クインシーによる湖畔詩人の肖像が家族や友人たちを激怒させたのは、容姿と人格の欠点をふくめて、全体としてあるがままに詩人たちを描いたからにほかならなかった。[*49]

当時は、すでに触れたとおりサー・ジョシュア・レノルズの古典主義的絵画理論の影響もあって、肖像画というものはモデルの似姿や特殊な個性を追い求めるのでなく、一般化された、あるいは理

想化さえされた姿を描かなければならないという通念があった。また、ド・クインシーによる肖像は、やはり偉大な詩人たちに敬意を示すのが当然と考えられていた文学的な伝記の範も越えていた。しかしながら、遺族家族の反発を買ったとしても、それは逆説的に、つねによい面と同時に悪い面もふくむ「個人の現実」（先に引用したセアラ・コールリッジの言葉からの借用）におおむね立脚していることを証明しているのだ。関係者からの否定的な反応は必ずしも文学的産物としての地位を下げるものではなく、むしろ、その写実性を保証する勲章となる。

すでに紹介したとおり、ウォシントン・オールストンが「上機嫌の極みに――つまり詩的な状態にあるコールリッジ」を描くことは不可能である、あるいは、少なくとも自分の腕のおよぶところでないと認めているのにたいして、ド・クインシーの散文による文学的肖像は、本稿でもいくつかを引用してきたその最上の箇所においては、肖像画家たちの手の届かないもの、すなわち、休息しているのではなく、動いている生身の詩人をとらえているといえる。必要とあれば率直かつ正直すぎる眼差しをかつての偶像に向けることもあえて辞さない決意と、観察したものを正確に描きだす卓越した散文術、つまり、セアラ・コールリッジのあげた順とは逆になるが、偉大なる「鑑識眼」と「雄弁」だけでなく、決して完全には失うことのなかった詩人たちへの「内なる共感」が備わってはじめて、影響力ある絵画理論のせいでとりわけあの時代には画家たちが見逃しがちだったものを、すなわち、モデルたちの迫真の姿をとらえることができたのである。だとすれば、ブランシャードやペイリーが、それぞれの肖像画の相対的迫真性を検証するための準拠枠として、この文学的

図9　ヘンリー・ウィリアム・ピカーズギル Henry William Pickersgill 作ワーズワス肖像（1836）のW・H・ワット W. H. Watt による版画複製　1836年　出典：Blanshard Plate 44a
肖像原画は同Plate 14bを参照

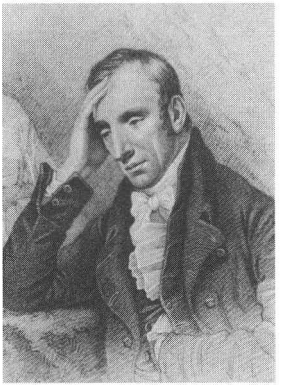

図8　リチャード・カラザーズ Richard Carrhuthers 作ワーズワス肖像のH・メイヤー H. Meyer による版画複製　1819年　出典：Blanshard Plate 42a
肖像原画は同Plate 5 を参照

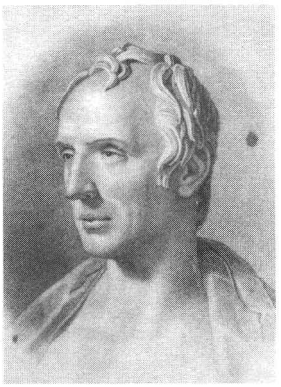

図11　サー・フランシス・レガット・チャントリー Sir Francis Legatt Chantrey 作ワーズワスの大理石胸像（1820）のウィリアム・フィンデン William Finden による版画複製　1845年　出典：Blanshard Plate 45b
胸像は同 Plate 8b を参照

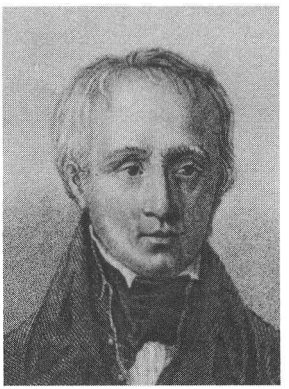

図10　サー・ウィリアム・ボクソール Sir William Boxall 作ワーズワスの肖像（1831）のR・ロッフェ R. Roffeによる版画複製　1835年　出典：Blanshard Plate 44c
肖像原画は同 Plate 12b を参照

な肖像の章節を数多く引用しているのも、本末転倒に見えながら、実は必然的で筋がとおっているように思われる。

ブランシャードもいうように、顔面石膏像と比べれば、ワーズワスの肖像画はいずれも相当自由に描かれて、大ぶりな鼻や駱駝のような上唇、分厚く下品な口や離ればなれの小さな目など、詩人の顔の欠点が巧みに修正されている。そして、「広く複製された肖像［図8・9・10・11］とそれに付随した讃辞は、紋切り型で感傷的のものになる傾向があった。複製の肖像と讃辞のせいで『ダディ・ワーズワス』という不幸な幻想が生みだされたにちがいなく、その幻想は多くの若い読者や詩人たちを遠ざける保証つきのものだった」という推測が的外れでないことは、もっと荒々しい肖像、たとえば、顔面石膏像の作者でもあるヘイドンによる一八四二年の肖像画［図12］と比較してみると明らかである。大衆の目に触れる機会の多かった複製図像は、たしかに柔和でハンサムに描かれているため、家庭にもうけいれられやすかったとしても、老いてなお脚力の衰えを見せず齢七十にしてヘルヴェリン山に登ったという詩人のごつごつした力強さが欠けている。ヘイドンによるヘルヴェリン山の老ワーズワス像は、ブランシャードが詩人という種に共通の特性で

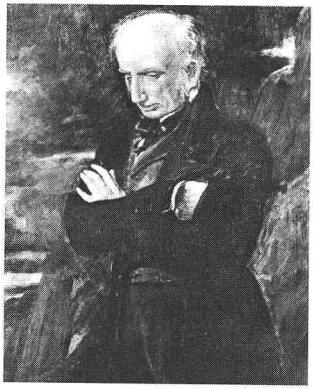

図12　ベンジャミン・ロバート・ヘイドンによるヘルヴェリン山のワーズワス像　1842年　出典：Blanshard Plate 23

なく、詩人独自の個性を強調することで詩人を劇的に表現し、当時とは趣味のちがう現代人をも満足させうる、当時にあっては例外的な存在としてきわめて高い評価を与えている肖像画である。[*50]

以上の考察にもとづいて結論を述べれば、湖畔詩人の表象として真に迫り優れているのは、たとえそれが描かれた本人と関係者にとって目にも耳にも痛いものではあっても、いやむしろそれだからこそ、ド・クインシーの描いた肖像だったということになる。

註

＊1 David Piper, *The Image of the Poet: British Poets and Their Portraits* (Oxford: Clarendon Press, 1982) 120, Richard Holmes, *NPG Character Sketches: The Romantic Poets and Their Circle* (London: National Portrait Gallery Publications, 1997) 12 に引用。本稿での引用は後者によっている。以下、英語原典からの引用は筆者本人による日本語訳を本文中に記し、英語本文については註で原文出典箇所の指示のみをおこなう。既出の文献に再度言及する時は原則として著者の姓とページ数だけをしるす。

＊2 Morton D. Paley, *Portraits of Coleridge* (Oxford: Clarendon Press, 1999) 45.

＊3 レノルズの絵画論の影響から、当時の肖像画家が個性よりも一般化、理想化された姿を求めたことについては、Frances Blanshard, *Portraits of Wordsworth* (London: George Allen & Unwin, 1959) 25, 31-33 を参照。それにまつわる二つの引用は、Blanshard 112, 111. 顔面石膏像と文章による肖像への言及は、Blanshard 112. レノルズが王立美術院学業成績優秀者表彰式などの折におこなった講演を集めたこの

著作では、「肖像画においてすら、優美さだけでなくおそらく似通いまでもが、顔の造作すべての正確な類似を観察することよりもむしろ、全般的な雰囲気をとらえることにかかっているのである」(Sir Joshua Reynolds, *Discourses on Art*, ed. Robert R. Wark (New Haven: Yale UP, 1997) 59) と述べている第四講話(一七七一年十二月十日)の一節が、この問題についての見解を要約している。

＊4 ベサムによる肖像画についての引用は Paley 48. 顔面石膏像との比較記事は Paley 80 を参照。

＊5 この作家についての伝記的情報をふくむ主な文献を古いほうから順にあげておく。David Masson, *De Quincey*. (*English Men of Letters Series*) (London: Macmillan, 1881); Alexander H. Japp, *Thomas De Quincey: His Life and Writings* (London: John Hogg, 1890); Horace Ainsworth Eaton, *Thomas De Quincey: A Biography* (New York: Oxford UP, 1936); Edward Sackville-West, *A Flame in Sunlight: Life and Work of Thomas De Quincey* (London: The Bodley Head, 1974; first published, Beccles: William Clowes & Sons, 1936); John E. Jordan, *De Quincey to Wordsworth: A Biography of a Relationship* (Barkley and Los Angeles: U of California P, 1962); Hugh Sykes Davies, *Thomas De Quincey* (Harlow, Essex: Longman, 1964); Judson S. Lyon, *Thomas De Quincey* (New York: Twayne Publishers, 1969); Grevel Lindop, *The Opium-Eater: A Life of Thomas De Quincey* (London: Weidenfeld, 1993; first published, London: Dent, 1981). 大部ながら最後のものが入手しやすい。小冊子に粋をつめ込んでいて洞察に満ち、作家の概略をつかみやすいのは Davies のものである。日本語の文献では、先駆的な菊池武一『ディ・クィンシー　研究社英米文学評伝叢書42』(研究社、一九三四年)のほかに、日本版『トマス・ド・クインシー著作集III』(国書刊行会、二〇〇二年)の巻末に筆者が記した略伝も参考になる。

＊6 『テイツ・エディンバラ・マガジン』一八三五年八月号にのった記事の一部。湖水地方に定着する前のオックスフォード大学時代の追憶が中心となっているため、本来ならば湖水地方関係を集めた作品

には入れないのが普通だが、デヴィッド・ライトはペンギン版の *Recollections of the Lakes and the Lake Poets*, ed. David Wright (London: Penguin, 1970) に収録し、ライト版におおむねもとづいた日本版『トマス・ド・クインシー著作集IV 湖水地方と湖畔詩人の思い出』(藤巻明訳、国書刊行会、一九九七年)でも巻末付録として収めている。これ以後、湖水地方にかかわる記事の日本語の出典指示は、国書版著作集IVの略称『思い出』のあとに漢数字で示し、ライトのペンギン版の英文の該当箇所を略称Wrightのあとに算用数字で示す。日本語訳は一部文脈に合わせて変えた。大学時代の回想は『思い出』五一三、Wright 118.

＊7 『思い出』一〇二、Wright 100.

＊8 『湖水地方と湖畔詩人の思い出』という書物の成り立ちの要点は以下のとおり。一、一八五〇年著者の存命中にアメリカで刊行がはじまり、二十三巻をもって一八五九年に完結した世界最初のド・クインシー全集の第五、六巻に、『テイツ』の湖畔詩人関係の記事のほかに、同じ雑誌に一八三七年から一八四一年にかけて掲載されたチャールズ・ラムほか主にロンドンの文人についての交友回想録七篇も一緒に収められて、『文学的回想』*Literary Reminiscences* と名づけられた。二、ジェイムズ・ホッグ James Hogg が、著者ド・クインシーの献身的協力を得ながら編集して一八五三年に刊行をはじめた『真摯かつ陽気なる選集』*Selections Grave and Gay, from Writings Published and Unpublished, by Thomas De Quincey*, 14 vols. (Edinburgh: James Hogg, 1853-60) の第二巻（一八五四）に、コールリッジとワーズワスの思い出を中心とする『テイツ』の記事十回分（国書版『思い出』の第一から第五章に相当）に、湖水地方とは関係ない記事もくわえられて『自伝的素描集』*Autobiographic Sketches* という題名をつけられた。編集の段階でド・クインシーは都合の悪い箇所を大幅に改訂し、削除と追加をおこなった。この選集は著者が没した翌年の一八六〇年に十四巻で完結した。つまり、『テイツ』掲載時、ワ

ーズワス関係の五回分の記事（『思い出』第二章から第五章に相当）には「湖水地方の回想」'Lake Reminiscences' の題名がつけられていたものの、作者の存命中には湖畔詩人の思い出に類する語句を冠して一巻にまとめられた書物は存在しなかった。三、上記選集の改訂版が、十五巻で一八六二年から翌年にかけて出版されてようやく、その第二巻に選集初版のままの配列で、『思い出』の第一章から第五章に相当する記事が集められて巻全体の題名が『湖水地方と湖畔詩人の思い出』*Recollections of the Lakes and the Lake Poets* と名づけられた。これがこの類の題名をつけられた最初だが、ライトの指摘するとおり著者の遺言によるものかどうか確定はできない（Wright 26）。四、デヴィッド・マッソンの編集により一八八九年から一八九〇年にかけて刊行され、その後長くこの作家の定本とされてきた十四巻の『トマス・ド・クインシー著作集』*The Collected Writings of Thomas De Quincey*, ed. David Masson, 14 vols.（Edinburgh: Adam and Charles Black, 1889-90）第二巻の最初の一一一頁以下に『文学と湖水地方の回想録』*Literary & Lake Reminiscences* として、『テイツ』の記事が収められている。しかし、これには湖水とは関係のないマンチェスターの思い出記事一篇（『テイツ』一八三七年二月号初出）がふくまれているほか、『思い出』の第五章、第十一章の記事が省かれている。また、テクストも雑誌掲載時の版ではなく改訂版だった。この著作集をもとにして湖水地方の思い出という名前の単行本が以後刊行されるが、そのたびに題名や収められる記事には異同があった。たとえば、サックヴィル＝ウェスト版は『湖畔詩人の思い出』*Recollections of the Lake Poets*（London: John Lehman, 1948）であり、ジョーダン版は『イギリス湖畔詩人の回想録』*Reminiscences of the English Lake Poets*（London: J. M. Dent & Sons Ltd, 1961）で、前者は国書版『思い出』の第五章、後者は同第十一章を収録していない。五、ライト編集のペンギン版（一九七〇）は、『テイツ』掲載の湖水地方関連記事をほぼすべて集め、しかも改訂版でなく、詩人への思いが生々しく語られている雑誌掲載版を採用している。

とから、筆者が担当した国書版『思い出』もおおむねこの版によりながら、複写した『テイツ』の記事と見比べつつ翻訳した。その後グレヴェル・リンドップを首席編者とする詳註のついたド・クインシー全集 *The Works of Thomas De Quincey*, gen. ed. Grevel Lindop, 21 vols. (London: Pickering and Chatto, 2000-2003) が刊行され定本になりつつあるが、初出尊重主義をとって雑誌掲載順に集め、コールリッジ追悼記事とそれ以外の湖水関係記事を別の巻に収録し、一冊の書物として成立する以前の状態に戻している事情もあり、本論では『思い出』とライト版を中心的にあつかう。

＊9 Jordan 336, Wright 24 ほかに引用。

＊10 コールリッジの結婚の経緯は『思い出』三七、Wright 53. アディソンの名言は『思い出』四一、Wright 56. F―嬢とは、フリッカー Fricker 嬢で、コールリッジとサウジーの妻たちの結婚前の姓。大学はちがっても、急進的政治活動を通じて知り合い意気投合したコールリッジとサウジーは、アメリカに共産主義的共同体を建設するパンティソクラシー（理想的万民同権主義）計画に夢中になって、移住する際の連れ合いにしようと目論んでブリストル在住のフリッカー姉妹とつきあっていた。やがて、中心人物の二人の仲違いにより、この計画は頓挫する。熱が醒めたコールリッジは結婚を渋るが、サウジーの説得をうけて最後には折れ、サウジーの妻となるイーディス Edith の姉セアラ Sara と責任をとって結婚する。二人の詩人は義兄弟となって、その後も一生かかわりつづける。なお、ド・クインシーは、この姉妹についてバイロン卿 Lord Byron が『ドン・ジュアン』*Don Juan* のなかで身分の低い「女物帽子屋」(Milliner) だったという当てこすりをおこなっているのは卑劣だと非難しているが、これもむしろ実際には、このような言及によって身分違いの結婚という事実を改めて読者に思い出させることを意図しているように思える。

＊11 剽窃については、コールリッジの追悼記事の冒頭で初対面の経緯を話しはじめた直後、『思い出』一

三ー二〇、Wright 36-41 で四つの具体例をあげて長々と述べている。王立研究所の講演の戯画的報告は、『思い出』六九ー七三、Wright 77-79 にあり、阿片服用のため寝過ごして遅刻、言い訳からはじめた講演では引用が出鱈目であるうえに、心も魂もこもっていなかったとこき下ろしたあと、追い討ちをかけるように、早咲きの才能が鷲の鉤爪を挫かれるように挫折した様を、ジョン・ミルトン John Milton の「闘技士サムソン」'Samson Agonistes' 八〇ー八一行からの引用で締めくくっている。「ああ！ 闇、闇、闇！／真昼の焔の如き陽光のただなかに、／癒しがたき暗闇、皆既の蝕」云々、と。たしかに一八〇八年の連続講演は病気がちで、遅刻、欠講が多く、途中で中止になっているが、内容がよかったためか研究所側はコールリッジにたいする評価を変えることはなかった。ド・クインシー自身、同年三月二十五日付のドロシー・ワーズワス宛書簡で、この記事とはまったく調子の異なる真摯な態度で講演の報告をおこなっている。

＊12 コールリッジの阿片依存の告白は『思い出』二三、Wright 43.「外なる良心」の雇い入れは『思い出』一〇〇、Wright 98.

＊13 『思い出』一〇二ー一〇三、Wright 99-100.

＊14 Wright 14, Lyon 112 などを参照。

＊15 『思い出』二六、Wright 46.

＊16 『思い出』一〇二ー一〇三、Wright 100.

＊17 *Collected Writings*, ed. David Masson, I 316. 国書版『著作集III』巻末に筆者が記したド・クインシー略伝五四七頁にこの一節への言及がある。

＊18 一八〇九年五月二日付で、当時コールリッジが記事を執筆していた『モーニング・ポスト』*The Morning Post* と『クーリア』*The Courier* の社主だったダニエル・スチュアート Daniel Stuart 宛に書い

た手紙の一節。Samuel Taylor Coleridge, *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge*, ed. Earl Leslie Griggs, 6 vols.（Oxford: Oxford at the Clarendon Press, 1956-71）III 205. ド・クインシーの性格を鮮やかに浮き彫りにした発言として好んで引用される。Jordan 75, Wright 14, Lindop 173 などを参照。

＊19 Wright 14-15. この前置きのあと、ライトは半ページにわたって長々と、二人の共通点を列挙する。この序文は短いながら要を得たすばらしい作家紹介になっている。

＊20 『思い出』九九、Wright 97.

＊21 遺言執行人への圧力については Wright 24 を参照、罵言は Jordan 347, Wright 25 に引用。後者については、バロン・フィールド Barron Field という人物が出版するつもりで書いたワーズワスの伝記の草稿を詩人に送ってメモを書き入れてもらったものの出版されないままになり、大英図書館 British Library にそのまま保管されている資料（請求番号 Add. Ms. 41, 325, fol.15.）が原典。一五ページ目の欄外だけでは足りず、白紙の裏面にまでおよぶ鉛筆の書き込みは、ド・クインシーの記事にたいするワーズワスの憤怒をあますところなく示しているので、引用の前の部分も紹介しておきたい。「詩人たちの生きているあいだに出版されたということが問題なのではなくて、そもそも出版されたり、出版を意図したりすることそのものが問題なのだ。この男は、傷ついた感情とみずから称するものに影響されて記事を書いたと私は聞いている。こんな言い方をするのは、私がこの破廉恥な書物の一言一句たりとも読んだことはないし、これから読むつもりも金輪際ないからである。そもそもこの男と知り合ったのは、向こうが勝手に手紙を私に送りつけてきた結果だった。奴は七ヶ月わが家に居候していた。歓待をうけた場合のしきたりなどお構いなしの態度であの親切が報いられたことは、奴のしでかした手柄が私の耳に正しく伝わっているとすれば、それだけで十分明白だ」（Jordan 347）。

＊22 脚と胸の悪口は『思い出』一四二―四三、Wright 135. 早すぎる老いの表情とその逸話は『思い出』一五〇―五二、Wright 141-42. ド・クインシーは駅馬車の逸話を、「W〔ワーズワス〕は本当のところまさにこれからの世代に属し、希望を持って生き、七歳の子が成長して大人になるのを期待してもなんら差し支えないのだと聞かされ、Wの表情に露なその早すぎる老いについて、ごく普通の人々の一行全員によってこの嘘偽りのない驚愕という形で顔に表わされたあからさまな表情が、Wの心に残されたのだった」と嫌味たっぷりに締めくくっている。

＊23 ワーズワス夫人の不器量は『思い出』一三三、Wright 129. 詩で讃えられた夫人の目の実態は『思い出』一三六、Wright 130-31. 夫人の無口と無教養は『思い出』一三三―三四、Wright 129. ドロシーの動作と姿勢は『思い出』一三八、Wright 132.

＊24 Jordan 214.

＊25 サックスヴィル＝ウェスト編の *Recollections of the Lake Poets* ix-x. この版については＊8も参照。ド・クインシーにとって「『理想の父親像』とは、すべてを理解して赦し、決して立ち去ったり、変節したり、冷淡さや無関心を（敵意はいうにおよばず）示してはならない」（x）存在だったという。リンドップも、ワーズワスに父親像を求めて得られなかったと示唆している（Lindop 165）。

＊26 『思い出』一五六、Wright 145.

＊27 『思い出』一五九、Wright 147-48.

＊28 『思い出』二二一―二五、Wright 192-94. ライトは、ド・クインシーが湖水地方の記事を『テイツ』に掲載していた時期は、時に飢え死にしかかるほど貧困のどん底に沈んでいただけなく、一八三七年には最愛の妻マーガレットを亡くしてもいるので、遺産や名誉職に恵まれるワーズワスや援助者が引きも切らず現われるコールリッジの幸運を、自分の悲運と比べて妬みのこもった眼差しで見たと

しても不思議はない、という同情的な見方をしている。Wright 22 を参照。

*29 『思い出』二五六、Wright 217.

*30 『思い出』五〇六、Wright 383-84.

*31 Henry Crabb Robinson, *Henry Crabb Robinson on Books and Their Writers*, ed. Edith J. Morley, 3 vols. (London: J. M. Dent and Sons Limited, 1938) I 195. Jordan 231-32, Wright 13, Lindop 218-19 も参照。共通の知り合いであるロビンソンを互いにそれほど離れていない相手の家まで送っていく際に、二人ともロビンソンを家の近くあるいは門などに置き去りにして、相手の家には絶対に入らなかったという。

*32 鑑識眼と雄弁は Sara Coleridge, *Memoir and Letters of Sara Coleridge*, 2 vols. (London: Henry S. King & Co, 1873) I 115. 内なる共感はセアラ・コールリッジが編集して出版した父の *Biographia Literaria* 2nd Edition (1847) II 408-409. Japp 215, Wright 15 に引用。

*33 『思い出』二三―二四、Wright 43-44.

*34 ライトは二人の阿片中毒度を数量的に算定している。「コールリッジの中毒のほうが無限大に重症だった――一時期阿片丁幾（チンキ）を一日に八万滴服用しており、これはド・クインシーの十倍の服用量だった」（Wright 15）。ただし、この箇所の註によれば、阿片とロマン主義の研究書で名高いアレシア・ヘイター Alethea Hayter の見積もりはもう少し低めで、コールリッジの服用量は一日二万滴だが、それでもド・クインシーの二倍にはなる。ド・クインシーの服用量はライオンによれば、一八一三年から一八一五年にかけて、八千から一万二千滴でライトの数字と合っているが、この程度でも阿片を溶かして飲みやすい丁幾にするためのアルコール分だけで病気になっておかしくないほどだったという（Lyon 59）から、コールリッジの服用量はヘイターにしたがったとしても常軌を逸した水準と考えざるをえない。

＊35 Lindop 332. 英語原文は 'A "photographic" faculty of recall'.

＊36 Jordan 347, Wright 25, Lindop 333 に引用。Jordan の引用箇所に August 27, 1839 (Dr. William's Lib. Mss.). という註がついている。原典はロンドンにあるウィリアムズ博士図書館におさめられている一八三九年のクラブ・ロビンソンの書簡中にある一節。

＊37 行を分けて引用した一節もふくめて、『思い出』一三七－三九、Wright 131-32.

＊38 'Lines Written a Few Miles Above Tintern Abbey' ll. 119-20. 英語原文は 'the shooting lights / Of thy wild eyes'. この当時の妹ドロシーの狂おしく燃えるような眼差しは相当印象的だったらしく、同じ詩の一四九行目にも 'thy wild eyes' というまったく同じ表現がくり返されている。詩の原文は William Wordsworth, *Selected Poems* (*Penguin Classics*), ed. Stephen Gill (London: Penguin, 2004) 65 を参照。

＊39 ドロシーの目覚しい才能への言及は、『思い出』一三九、Wright 132. 最後の別れの言葉は『思い出』二四〇、Wright 206.

＊40 『思い出』一四四、Wright 136.

＊41 Sackville-West 248. 英語原文は 'his dry, impish humour'. さらに、滑稽味こそがこの回想録に「将来読者の目を再び向けさせることになるだろう」(253) と予測しつつ、「このような秘密暴露の棘は、あれほど面白おかしく語られているために却って一層突き刺さるように感じられたに違いない」(247-48) と、滑稽味が描かれた側にもたらす別の効果をも忘れずに指摘している。ライトもやはり滑稽味を特筆すべき点としてあげながらも、それは知的なものでなく、機知というよりはどたばた喜劇だと指摘している (Wright 17)。沙虫のように歩いて同行者を道端へ追いやる詩人の姿はその一例かもしれない。

＊42 『思い出』一四四、Wright 137.

＊43 ワーズワスの顔の細部にいたる特徴は、『思い出』一四五―四八、Wright 137-40.

＊44 『思い出』一五五、Wright 145.

＊45 Lyon 73を参照。ホーラス・エインズワース・イートン Horace Ainsworth Eaton が登記所の記録まで巻末資料につけて論じるところでは、ド・クインシーは借金の未返済により、『テイツ』の記事を書く時期がすっぽりおさまる一八三一年からの十年間に九回も角笛を吹き鳴らされて法の埒外にあるとの宣告をうけたうえで、公権を剥奪されるほどの貧困状態だった（Eaton 334-94, 519-20）。また、アレグザンダー・H・ジャップ Alexander H. Japp によれば、債権者の追及と逮捕を逃れられる唯一の場所だったエディンバラ大聖堂の聖域ホーリールードに逃げ込むことたびたびにおよび、『テイツ』掲載の最良の記事のいくつかはそこで書かれたという（Japp 219）。

＊46 Wright 10.

＊47 Wright 16を参照。ライトは、「ド・クインシーは客観的でなかった――その印象も肖像も個人的なものであり、自分自身の感情と関心に彩られていた。ド・クインシーは、精神的な嘘を字義どおりの真理であると偽って憚らないカメラのような存在ではなかった」と述べている。書くものに相当の偏見や妬みがこもっていることは、これまでの引用からも明らかだが、すべての文章がそのような色合いに染まっているわけではなく、そうでないときに対象に向けられる観察眼の鋭さは、リンドップのいう「写真的」記憶術の力もあって、端倪すべからざるものがあった。難しいのは、どこまで悪意がこもっているか線引きをするところにある。ただし、ライトの引用も最後の一文を読めば、心のなかでは嫌っているのに真実をありのままに呈示すると称して、そうした本心を隠蔽してしまうような、口実としての客観性や写実性に堕していなかった点をむしろ逆説的に評価する発言のように思われる。

＊48 John Beer, 'De Quincey and the Dark Sublime: The Wordsworth-Coleridge Ethos', *Thomas De Quincey Bicentenary Studies*, ed. Robert Lance Snyder (Norman: U of Oklahoma P, 1985) 170. ビアは、ワーズワスとコールリッジについての回想録があれほど不完全になってしまった理由を、次のように推測している。ド・クインシーがわが子のように可愛がっていたワーズワスの娘ケイト Kate が幼くして死んだ衝撃から立ちなおるためには、病気になってすべてのイメージを心のなかから拭い去らなければならなかったので、そのときに湖水地方とそこの詩人たちにまつわる思い出の少なからぬ部分が失われた。

＊49 欠点を描くことこそ伝記の魅力であることについて、ライトは、天才の輝きに必ずつきまとう暗部をこと細かにあげつらうような欲求不満のこもった鋭い眼差しがなければ嘘っぱちでつまらない聖人伝しか書けないとするなら、不肖の弟子ほど面白い伝記を書く適任者はいないと卓見を述べる。そして、ド・クインシー描く欠点だらけの詩人の肖像の魅力について、この上ない讃辞を送っている。「ド・クインシーによるワーズワスの肖像は悪意に満ちているといわれてきたが、人を憤慨させる、ひたむきなまでの詩人の人格の自己中心性から滲みだす魅惑を、これほど強烈に伝えている伝記はほかにない」(Wright 10)。

＊50 顔の欠点の修正については Blanshard 112 を、「広く複製された肖像」の特定については Blanshard 110-11 を参照。「ダディ・ワーズワス」という不幸な幻想の引用は Blanshard 107. ヘイドンの肖像にたいする評価は Blanshard 118 を参照。なお、ヘイドンは、『キリストのイェルサレム入城』(一八一九)でキリストをとりかこむ群像のなかにワーズワスの姿を紛れこませたほか、その前年に齢五十を目前にしていまだ野性的な詩人の肖像も描いている。